

野村望東尼全集を読む

春日, 政治
九州大学名誉教授, 学士院会員

<https://doi.org/10.15017/12347>

出版情報 : 語文研究. 8, pp.30-31, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

野村望東尼全集を読む

春 日 政 治

佐佐木信綱博士の編集にかゝる野村望東尼全集が、本年四月同刊行会によつて出版された。版八百余頁、近世末女流の遺作集としては類の少い大部なものである。自分も一本を恵まれたので、この夏消暑の友として一読の機会をもつたのであるが、自分が望東尼の歌文の全遺作にわたつて初めて通読するのを得たのはこの全集の賜ものであつて、近來の謠物中滋味深い一つであつた。望東尼の歌集・日記等は早く世に聞えて、個個に上版され來つた所であつたが、その文學的異才を初めて世に推稱したのは、實に佐佐木博士であつた。爾來博士は普く資料の探訪に力めつつ、これが全集の編成を企てられ、昭和十八年已にその稿を脱し、大阪に於て印刷にかかられたが、校了の上紙型まで成つた二十年の暮、たまたま戦火に罹つて可惜灰燼に帰したのであつた。以來十余年を経たが、この度残存の校正刷を本として、復興完成されたのがこの書である。読者は先ずこの書が成るまでの痛ましい難路に思いを致すべきである。本書の中に缺字のままに残されている箇所は、校正刷が火の爲に不明となつた跡であつて、これらを見て編者の容易ならざる難苦は察するに余るものがある。

本書の編次は歌集・日記・書簡の順を以てし、先ず家集向陵集

を巻首におき、次に上京日記・夢かぞへ・同附載・稿本ひめしまにき・刊本比売鳥日記・防州日記を以てし、終に書簡集を掲げ、尚「のこりぐさ」として歌文數篇を補つてある。多くはこれまで版に上つたものであるが、日記・歌切等の断章及び書簡百二十余通は未だ發表されなかつたものであつて、新たに編者の採集にかかるものである。かくてここに望東の遺文は概ね集大成されたのであつて、作者の靈もいかに慰安されることであらう。

さて資料はすべて作者自筆の稿本に拠つたものであつて、しかも嚴密な校合を経て、力めて原本のままの姿を伝えるに忠実であることは、従前の諸刊本と違を殊にした、本書の貴ぶべき特異点である。編次は大佐各作品の年代的順序に従ひ、自ら作者の経歴に沿うものといつてよく、書簡も亦時代を逐つて類聚されてあるから、亦歌集・日記に平行して照合し得るものである。尚日記・書簡に表れ来る人名・地名に対して、解説の索引を附けられたのも、編者の懇切な注意である。それ故我等はこの編次に随つて本書を通読することによつて、望東の行実を年代を逐つて読みゆく感を与えられ、而もそこに断隙がなくよく一貫して終始あり、恰も渾然たる一巻のうろわしい自叙伝に接する観がある。もとより重複する点もあるが、そ

れらは又筆を変えて出来たものであって、記事の精粗あり歌句の異同などあって、互いに欠けたるを補い簡なるを詳かにするものがある。若しそれぞれの書簡に至っては周田との關係・交情は勿論、日記を補説する数数がある、望東の伝記の裏づけとして亦無くしてはならない役目をなしている。

家集向陵集は、言道の門に入ってより上京以前二十年間の歌を集めてあるが、更にその活躍期にして最も波瀾の多かつた時の歌は、日記、及び書簡の中にこの多数が保たれているのであって、我等はこれらのすべての歌を見渡して、始めて彼の作風の如何及びその時代的変化なども精しく知るべきであらう。散文に於ては日記が主をなしているが、中には事実を取捨し行文を推敲して十分整った成稿のものあり、自由奔放思うがままに書き流した草稿のものあり、更に書簡に至っては相手の親疎・男女・高下等による文趣の異なるものがあって、それら何れもが彼の女の非凡な彩筆を味わせてくれるものである。

望東は我が福岡の生んだ希世の女丈夫であつた上、散文に於ける天成の異才であつて、我等は郷土的に一種の恩慕を抱くものであるが、又その地理的・人事的環境をよく知る我等は、その散文に表れる地名・人名・土俗・方言等に対しても、他地方人に比して、より深い理解をもち得るのであつて、特に我等の注意がこの全集に引かれる所以である。歌は勿論歌文も共に用語が擬古のものであつて、今日の手軽い口語体の説物に比しては、とかく現代人に見放され勝ちのものではあるが、力めて味読する説物として広く世に勧めたい一書である。因みに本書によつて描き得る女性望東尼の特異な性格曲折ある生涯は、これを劇映画の材として、十分観者の興味を捕え得るもののあることを感ずるものである。終に郷土業界の有志の協力が、この書の刊行を遂げしめたことは、亦望まじき斯界の一

美事と讃えてよいであらう。昭和三十三年十月十五日稿　おわり

紹介

目加田さくを編註

平仲物語冷泉為相筆

著者はすでに「日本小説史概論上」(昭和28・11)および「平仲物語註釈」(昭29・1)を公けにされて、著者の抱懐される日本小説史論の構想の一端を、大局からの史的概観と、個々の詳論とを平行して試みることによつて示されたが、本書の出版は、かつて「平仲物語註釈」出版に際し、天下の孤本である静嘉堂文庫蔵本の「本文全部、少くとも問題のある文字だけでも」影印を望まれながら、やむを得ない事情のため活字刷刻とされた、著者そして予想される多くの読者の希望を満たされたものである。原本表裏紙の写真二葉を収め、影印本文百二十一頁、全四十段の七十六頁にわたる活字刷刻に頭注を施し、解題として(一)、原本、その所在、(二)、書名、(三)、名義、(四)、作者、主人公、(五)、本書成立年代、(六)、様式、(七)、研究書の各項目にわたつて簡潔に記述されてゐる。縦五寸六分、横五寸三分の原寸そのまま、文字及文字面寸法等一切原本に忠実に影写整版された優雅な本書は、従来の平仲物語研究を大きく推進する重要な役割を果たすことであらうし、大学高校の教材テキストとしては、活字王朝文学と違つた好ましい結果をもたらすことと思はれる。なほ著者は本年三月、旧版「平仲物語註釈」を修訂し、「平仲物語新講」(武蔵野書院刊、定価三〇〇円)として上梓されたことを併せて細紹介申しあげる。(武蔵野書院刊、昭和33・4・30、二〇・五種×十七・四種、二〇七頁、定価三〇〇円)(森山　隆)